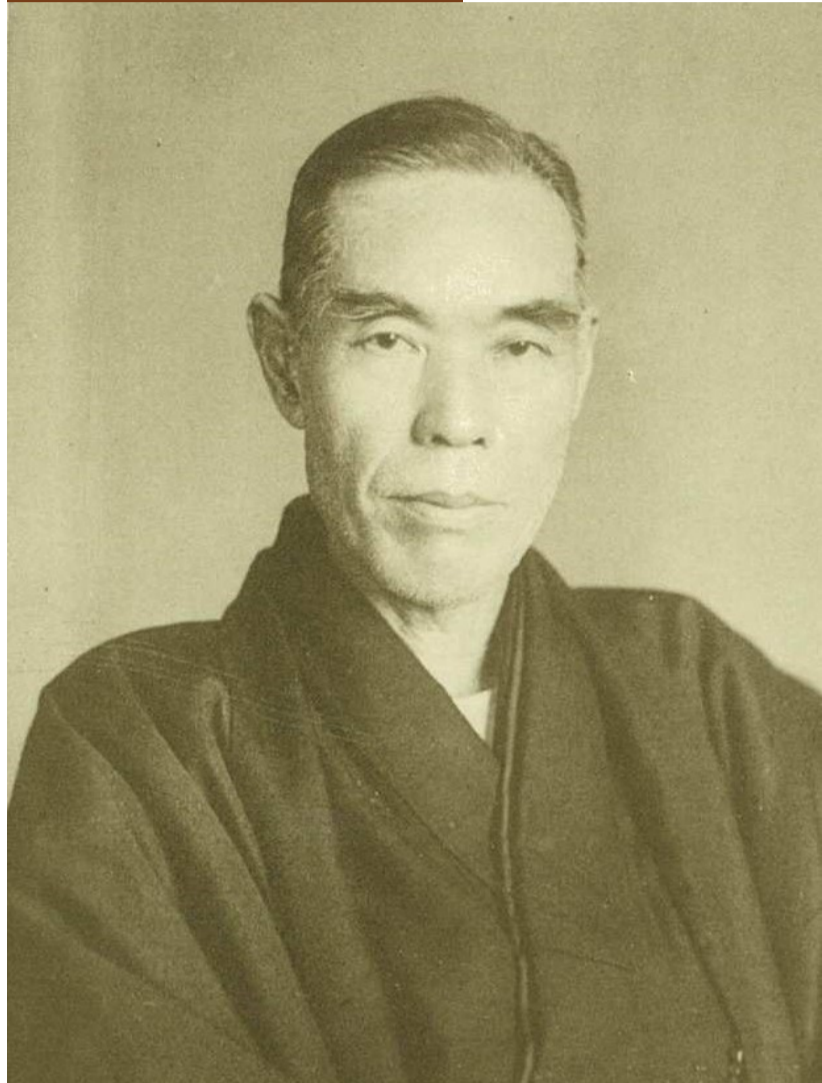


鉄道局の役人から転身し土木界を牽引

明治土木建築
請負業者列伝

菅原恒覧

すがわら つねみ



菅原恒覧

『鉄道工業合資会社二十年小史』より

菅原は安政6年(1859)岩手県一ノ関藩の士族の家に生まれました。向学心に溢れた青年期を過ごし、工部大学校(現在の東京大学工学部の前身)を卒業。明治19年(1886)鉄道局に入り鉄道建設に携わりますが、辞職して民間の請負会社に入社しました。明治32年(1899)菅原工業事務所を開設し、請負業者として独立。明治40年(1907)同業者と共に鉄道工業合資会社を設立し、「世紀の大工事」といわれた丹那トンネル工事などを請負いました。また業界団体の要職も務めました。

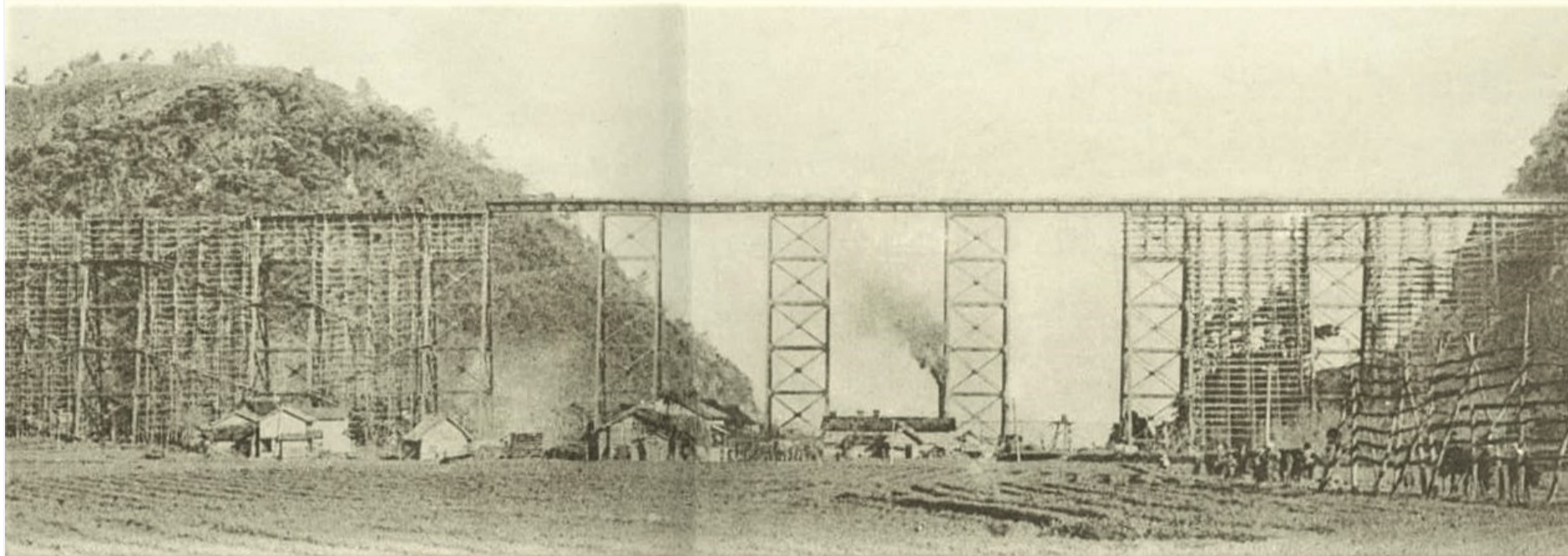
「常に世の中を見る」と、自ら改名

一ノ関藩の士族の子であった菅原は、明治4年(1871)散髪脱刀令が發布されると率先して鬚(まげ)を切り、幼名の忠之介から「常(ツネ)に世の中の動きを見(ミ)て考える」という意で恒覧(ツネミ)と自ら改名しました。この名はコウランとも呼ばれ、気性が激しかったため、剛乱(ゴウラン)や強乱(キョウラン)とも呼ばれていたといわれています。

菅原の請負業者への転身は、周囲の反対もありました。当時、請負業は社会的に認知されておらず、社会的地位のある役人からの転身は極めて異例なことでした。しかし菅原は土木請負業を改革するという強い決意を持っていました。後に設立した鉄道工業合資会社は、個々に分立していた請負業者を合同することで資本を強力にして事業を拡大、昭和8年(1933)株式会社に組織変更し、戦後まで事業を継続しました。また鉄道請負業協会会長、日本土木建築請負業者連合会会長、土木工業協会理事長など業界団体の要職を歴任し、土木界の改革に尽力しました。

菅原恒覧の仕事

【明治45年 竣工】余部橋梁（兵庫県）



工事中の余部鉄橋 『鉄道工業合資会社二十年小史』より

菅原は鉄道工業合資会社を設立直後、山陰線余部(あまるべ)橋梁の架橋基礎工事を請負いました。余部橋梁は兵庫県北部の日本海に面して立つ鉄橋で、長さ309m、高さは41mにも及びました。現在はコンクリート橋に架け替えられ、山陰本線鎧(よろい)駅—餘部(あまるべ)駅間を繋いでいます。

【昭和9年 竣工】丹那トンネル（静岡県）



東海道本線丹那(たんな)トンネルは、丹那盆地を貫くトンネルです。大正7年(1918)菅原の率いる鉄道工業合資会社と鹿島組が請負い、熱海口と三島口に分かれ着工しました。工事は困難を極め、工期7年の予定が、貫通まで16年の歳月を要しました。

鉄道工業が請け負った東口(熱海口)坑門
『丹那トンネルの話』より

【菅原恒覧】参考文献

鉄道建設業協会・編 『日本鉄道請負業史 明治篇』(鉄道建設業協会)

高崎哲郎 『鶴高く鳴けり 土木界の改革者 菅原恒覧』(鹿島出版会)

菊岡俱也 『建設業を興した人々 いま創業の時代に学ぶ』(彰国社)